

中齋塾東京フォーラム
平成 31 年度（令和元年） 第 6 回講話

平成 31 年 6 月 1 日
於 湯島聖堂

おはようございます。昨日、事務局と打ち合わせをしていて、明日の参加者は半分以下になるかもという話をしていました。何故ならば、人間は同じパターンでずっと過ごしていると、急にちょっと違いますよと言っても、そう簡単に変えられないものだと思っています。第 2 土曜日に東京フォーラムはあると摺り込まれている人は、無意識のうちに第 2 土曜日に来るかもしれません。

小此木さんの論語素読を聞いていて思ったことは、小此木さんは学び方の王道をいっていますから、今の進め方でよいと思いました。ただね、先ほど小此木さんと読み方の事前練習で、いくつか直した中で強く言ったものは頭の中に入っている。しかし軽く直したものは、全て間違えていました。だから、ちょっと言いますよ。今度はメモしたほうがいいですよ。

王道をいくということは、まず書かれた物を書かれたように読む練習です。そうしますと、「季氏 將に顓臾を伐たんとす。冉有・季路 孔子に見えて曰く、季氏 將に顓臾に事有らんとすと」ここらへんまでは、ずっと読める。「孔子 曰く、求、乃ち爾是れ過つこと無からんや」これで何度も引っ掛かったのが「是れ」のイントネーション。ちょっと強く言った方がいい。「過つこと無からんや」が、ずっと読めなくて、「ならんや」とか「ならかんや」って読んだりしていました。気がついていないと思いますが、本番では「ならかんや」って読んでいました。他の人達は客観的だから、書いてあるとおりに読んでいました。それから事前に注意を申し上げた「夫れ顓臾（せんゆ）は」頭の中に摺り込んであるから、ちゃんとこれは読んでいたのですが、1 回だけ顓臾（せんゆう）と読んでいました。「冉有 曰く 夫子 之を欲す」これ先ほど「夫子（ふうし）と読みましょうね」と言った時に、「はい。分かりました」と会話をしたのですが、本番では「ふし」になっていました。たぶん気がつかなかったのでしょうか。

小此木会員一抜けちゃいました。

人間は聞いた瞬間には、たいがい直らないから何回か練習する。そうすると直ります。くどく言って申し訳ないのだけれども、小此木さんの勉強の仕方は学びの王道をいって

るから、そのとおりにやればよい。書いてあるとおりに読む癖をつける。でもこれは難しい。

先日、中斎塾フォーラムの新旧理事長交代ということで、顧問の矢野先生の所に挨拶に行きました。前に、矢野先生のカレントの原稿が引っ掛かっていた。今回の今を語る、明日を生きる「新資本主義の時代への取組みが未来を築く」この文章よくできています。それで今回お邪魔をしたときに、「矢野先生は原稿どうやって書いておられますか」と聞きました。てっきり手書きで他の人がパソコンを打っていると思っていました。そしたら、自分でパソコンを使っていると言ったから、「すごいですね」と話しました。それで「でき上がった物を見直しされていますか」と聞きましたら、「見直しはします」と。「何回していますか」と聞きましたら、しつこいなと思ったのでしょね。「僕は5回見直しをします」と言います。「それは先生が見るのですか、他の方に見てもらうのですか」と。「僕は自分で見る」と言うから、「先生それは駄目ですね」という会話をしました。それは何故かと言いますと、自分で書いた物を一度読んでしまったものは、いくら字を見ても自分が読んでいる、摺り込まれている読み方しかないのです。だから小此木さんが「顛輿（せんゆう）」と、ずっと読んでいました。他の人がチェックすると「顛輿（せんゆ）」となります。それを何回も言うと、そうかと思うのですが、矢野先生は87歳で、あれだけの経歴があると、一度自分が摺り込んで読んでしまったものを直すのは難しい。この間お会いして、そういうふうに言いましたら、確かに一度頭に入ってしまったものは、いくら目が字を追っても、字を目で追うだけで読んで、おかしくないと思っていると反省していました。だから他人の目で見るのが良いということです。これも小此木さんとの会話で、思った時に思ったことをそのまま言うのはよくない。矢野先生にも「先生やってないじゃないですか」って言ったら、そこから喧嘩が始まりますから、他の科白に変えました。変えたのは「私、東洋経済新報で前に本を書かせて頂いた時に、東洋経済新報社では誤字脱字の一切ない本。表現がおかしいが、単純に誤字脱字ルビの振り方も間違えていない。間違いが一つもない本が出版できたら社長賞だと。必ず誤字脱字はあるものだ。だから色々な目で見る必要があるということを、東洋経済新報社で本を出した時に教わりました」と言ったら「そうだね、それは正しいね」と言います。そうすると自分のことを言われていると思わないわけです。でもどこかではっと気がつく。私も同じですけどね。小此木さんを題材にしながら、私も自分のことを話しているつもりです。時々、私の書いた本をみると、あちこち誤字脱字だらけ。この間、山田方谷を再販したいと連絡があり、出版社の佐久間社長が念押しで、御自分で見るだけではなく、中斎塾事務局の佐藤さんに見てもらってくださいよって言われた。それで危ないなと思ったから、佐藤さんが見た後に、智恵子さんも見てくださって振っておいた。そうしたら、私が見てチェックして、そのあと佐藤さんが見たら、また幾つか出て、智恵子さんが見たら、やっぱり違うのが幾つか出ました。だから見る人を変えると、誤字脱字や表現の不適切なもの、気がつくことはやっぱり出る。だから原稿を書くということは大変なこと。読むのも素読するのも同じことです。あと読んでいった中で、

141 ページの 2 行目。「是れ誰の過ちぞやと」の「誰」は、濁った方が良いとか、濁らない方が良いとか問答はあるけれど、普通「だれ」とは読まない。何で読まないのかは知りませんが、日本の古典、中国の古典を訳している物や漢詩を見ても濁らない。「たれ」って読みます。しばらく経って、やはり疑問に思ったら、学者オタクになって調べればいいのです。あと「虎 兕」はかなり意識されたみたい。虎や兕というのは獣で、想像上の、が入りますけどね。獣が檻から飛び出してきたところだけど、虎と兕は違う生き物だから、別々にわけましようかと念押しをしました。

ここに一文字分あげや半文字分あげているのは、ちょっと間をあけましようという意味です。この本を作る時かなり意識して、一文字分あげたときには明確に切る。半文字分あげのときには、ちょっと切る。そのように読み取って欲しい気持ちが入っています。

私が気にしたのは、『素読論語』の元になっている本は、聖堂で出している小さな論語のポケット本です。それは小さい字で書かれており、初めての人が読むために必要な配慮は一切なく、学者が使う小さなテキストです。それを入門編でもみな同じ物を使っています。『素読論語』の元のテキストを忠久先生に「字が小さすぎて読めないでしょう」と言ったら、「暗記しているから大丈夫だよ」と言いますが、「でも初めて読む人は暗記していないから、初めて読む人、それも御年配の人が論語を読むとなると、もっと字が大きい方が良いでしょう。そして読む時に、句読点などの工夫をしたら良いのでは？」と言いましたら、「それじゃ深澤さん。よろしくね」となり、出来あがった本がこの『素読論語』です。色々なものの配慮が詰まっていますので、くれぐれも読むときに、一文字分あいていたらどう読むのかな、半文字あいていたら、どう読むのか。ルビが自分の知っているルビと違うなと思ひ考へる。そうしたら、もう既に学びの道の第二段階へ小此木さんは入っています。第二段階は、読んでいて孔子の生きていた時代背景はどういうものなのだろう。先ほど冉有や季路、孔子は何歳差なのかと聞かれました。色々書いてあったけれども、そのとき孔子は何歳だったかは書いていなかったと思います。だから質問が出た。質問が出たということは、調べたということです。他のテキストを見て、疑問に思ったから聞いた。疑問に思うことは大変です。疑問の出ないのが普通です。聞くべきことが出てきたということは、第二段階に入ったと思って良い。だけど第一段階をいきながら第二段階も入ったので、第一と第二段階をいったりきたりしながら次に進んでいます。間違いなく良い方向にいています。第三段階は、読みながら、この時代はこうだ。だったら現代に置き換えるとどうなのだろう。自分に置き換えると、どうなのだろうと考へる。ポイントは、さっき「楽しくなりました」と言いました。小此木さんは調べて楽しくなってきた。ただ危ないのは、第一段階しっかり出来上がってから第二段階に入ったのではなく、第一段階がちょっとふわふわしながら、第二段階に入っている。それで第二段階が終わったというのではなくて、そのまま第三段階もちょっとかじり始めた。基礎がちょっとできた所に、その上にまた少し小石を乗っけちゃった。小石を乗つけた上にまたもうひとつ小さい石を乗つけたから、へたすると賽の河原になります。賽の河原になると全部崩れる。くれぐれも、一・二・三

の段階をきちんと進みましょう。一の段階は絶えず見直しをして、基礎段階を常にするよう、御努力をお願いします。余計なことを言いましたけど、小此木さんは良く調べてきたなと思い、それに半分は直して読んでいました。

今回、佐藤一斎で先生方に見て頂いたけれども、佐藤一斎の定本になっている本がありまして、けっこう分厚く難しくて七面倒くさい本があります。先生方に本や資料をお見せしながら色々と話した時に、忠久先生が「これは置いていってね。見るからね」と。「では、お預けします」と2冊お預けしました。しばらく経って先生に「本は、御覧になりましたか」と聞きましたら「はっ、何の話だ」となりましたが、良かったのは、その時すぐ周りの人があちこち探してくれました。でも残念ながら無かった。同じ本をまたネットで買いました。斯分会の事務局長と担当者が一所懸命に探してくれた。だいたい探す場所が決まっていて、どこに置くかも決まっているから、そこを見ればあるのですが、残念ながら今まだ宙に浮いたまま。でも先生は自分で何回もそういうことをしているから、そういうのも覚えていますので「深澤さんの本は見つかったかい？」って、時々言っているようです。摺り込まれているわけです。例外的なのは、木内信胤先生や石川梅次郎先生、宇野精一先生は、最後の最後までぴんしゃんしていた。一昔前の人ぴんしゃんですね。亡くなられるまで、頭はちゃんとしていたし、きちんとしておられた。ただ、病院に入っちゃうと「この無様な姿は見せたくない。病院に来るのはお断りだ」と言っていました。そういうことがあったから、この間、忠久先生にお会いした時「お見舞いに伺おうかと思って周りに話したら、見舞いなんか来てほしくないと言っていますというので行かなかったのです」と言ったら、御本人は「そんなことないよ。来てもらってもよかった」と言う。どういふ話の食い違いだと思いますが、エネルギーが余っている人は90代に入っても元氣だよという話になる。

この間、四宮さんと万葉集の話をしました。脱線の話ばかりで御免なさい。人がいないから色々な話をついでにします。

歌に詠んだものは、やっぱり疑問だなと思います。中西進先生が、令和という元号を考えた考案者だと世に出ました。御本人もそれを認めるような文章を文芸春秋に書きました。それで、私の同期の四宮さんは、毎月1回万葉集を教えています。万葉集で、ちょっと分からないことがあるから教えてくれと頼んで会いました。そうしましたら、前からでっぴり太ってどっしりして元氣いっぱいの人間です。毎月1回刊行物を送ってくれます。その中に和歌が入っていて、その和歌を見ていると自分のことが書いてある。御両親が亡くなることを克明に詠んでいる。亡くなった後は一生懸命お線香上げて、両親と対話をしているような気分だということを和歌で恋々と綴っています。そのうち自分も入院して手術をした。段々痩せ衰えてきた。友達も欠けてきた。私はいつまでこの世に生があるのか。悲しく情けないけれども、まあこれも天命かな。なにか悟ったような和歌が増えてきて、もうそろそろ死にそうということがいっぱい書いてあるのです。これは会っておいたほうがいいなと心の中にあつたので会いました。そうしたら相変わらずの体形で「四宮さん、和

歌にはもう今にも死にそうなこと書いてあるのに現実はどうなのか」と言ったら、しゃあしゃあとして「和歌は創作です」と言った。「創作か。それなら分かるよ」と話しました。頭でちらちら動いているものを、そのまま現実にあったようにして、作り物で書く。忠久先生も同じこと言っているなと思いました。漢詩を作るとき、事実を事実どおり書かなくていい。自分の願望を書けばいい。もう何回も話している忠久先生の 85 歳の漢詩。85 歳になって 74 歳の孔子も越えて、85 歳で亡くなった中国の大家とも肩を並べるようになった。私はこう年をとってきたけれども、世間で多少私のことを批判している人がいると聞くが、私は気にしないでニコニコ笑って楷樹の前で立っているという漢詩です。私はこの漢詩を気にいって詩吟で詠うようにしています。それで「先生、笑って立ったのですか」と聞いたら、「君これは漢詩だよ。別に笑ってその楷樹の前に立たなくても、そういうふうな情景を頭に浮かべれば、それでよい」と言います。だから四宮さんがそういうことを言っても、なるほど万葉集もそうかと納得しました。

古事記や日本書紀は表の歴史書であるが、万葉集は裏の歴史書だというふうに聞くけれども、万葉集は裏の歴史書に入っているの？と聞いたら、「当たり前じゃないか。だって考えてごらん。藤原一族に大伴（旅人）一族は追いやられた。だから万葉集を見ると大伴ばかり。素晴らしい本を作って、自分がその選者になったから、自分の味方ばかり入れた。追いやった藤原一族は権力者だから、ちょっとは入っているけれど圧倒的に大伴一族が入っている。自分が戻ったときに困るから、権力者もちょっとは入れてある」そういう話をしましたが、普通の万葉集の解説書には書いていないなと思いました。学生時代から万葉集を 50 年間かな、万葉集をやり続けた人間は、やっぱりちょっと味なことを言うなと思いました。脱線はこれぐらいで、いつもの恒例の質問をいたします。

《恒例の質問》

- ・ 今月 1 ヶ月ぐらいでいきましょうか。良い日が続いているなど思われる方。
天秤に掛けると、手も拳がらない、顔も上がらない。天秤には掛けないでください。
- ・ ここ 1 ヶ月、嘘は比較的ついてない。
客観的に検証する必要はありません。自分の心持ちだけでよい。
- ・ 今月 1 ヶ月、有難うと言ひ、有難うと言われることが多かった。
- ・ ここ 1 ヶ月、健康法を実践している。
- ・ ここ 1 ヶ月、自分磨きは我ながらよくやっている。
- ・ 昨晚寝るときに、明日以降のことをイメージして寝たかどうか。はい有難うございます。

先ほど小此木さんとの話の中で、ふっと浮かんだものがあります。ついこの間、川崎市多摩区でスクールバスを待っている子供達に包丁で襲い、直後に自分の首を切った事件が

起きました。その時にネットで、「死にたいのなら一人で死ね」という類のものが溢れた。それを諫めるものも書いてあった。

小此木さんと話している中で、思った時に思ったことをそのまま言うので、社会から虐げられていると思っっている人達は沢山いる。思った瞬間にとんでもない事をした。死にたければ一人で死ねみたいなのが溢れたらば、やっぱり社会は虐げられている人は虐げる。こういう事件を起こしたら叩かれて、やっぱり社会ってのは、こんなものなのかと思うと事件を起こしたり、もっと俺は派手なことをしてやるぞと思っ、とんでもない事件を起こすから、くれぐれも思っ時に思っことをそのままずばりと表現をしないようにしたほうが良い。それと似たようなものが最近ネットに出ていたという会話をしました。

翻って、自分自身のことを論語に置き換えなきゃいけないわけです。さて、世間で自分が思っことを言う。大概ね、自分に返ってきます。つい出てしまうのが人間です。でも、お互いに氣をつけましょうという類の話でございます。

今日は私の話の中で、小此木さんの話が誘発しました。確か、今回の素読は最後まで読んでいいですよと言ったのですよね。だけどあまりにも長いから、半分ぐらいにしましょうというので切った。ということで、長ければ長いほどぼろがでます。ちょっとした自信があると、大丈夫だよ、読めるよと思っのだけでも、短い方がいいですね。次は私が手を挙げたので、最後まで読んで解釈と致します。

《論語の視点》季氏篇1 前半

【一】季氏 將に顓臾を伐たんとす。冉有・季路 孔子に見えて曰く、季氏 將に顓臾に事有らんとすと。孔子曰く、求、乃ち爾是れ過つこと無からんや。夫れ顓臾は、昔者先王 以て東蒙の主と為せり。且つ邦域の中に在り。是れ社稷の臣なり。何を以て伐つことを為さんと。冉有曰く、夫子 之を欲す。吾 二臣は皆欲せざるなりと。孔子曰く、求、周任 言えること有り。曰く、力を陳べて列に就く。能わざれば止むと。危くして持たず、顓りて扶けずんば、則ち將た焉んぞ彼の相を用いん。且つ爾が言過てり。虎 兕、柙より出で、龜玉 櫝の中に毀れなば、是れ誰の過ちぞやと。冉有曰く、今 夫れ顓臾は、固くして費に近し。今取らずんば、後世必ず子孫の憂いを為さんと。孔子曰く、求、君子は夫の之を欲すと曰うを舍きて、必ず之が辭を為すを疾む。

今風でいきますと、魯国の富を篡奪している。君主の実入りから、かなりの額を自分の懐に入れてる。季氏が顓臾を征伐して、その富を取ろうとした。冉有と季路がその季氏の配下として仕官している。冉有と季路が孔子に会って告げ口かな。後々お師匠さんに叱られてはかなわんで先に言っとおこうと。「季氏 將に顓臾に事有らんとすと」事を起こそうとしている。「求、乃ち爾是れ過つこと無からんや。夫れ顓臾は、昔者 先王以て東蒙

の主と為せり。且つ邦域の中に在り」孔子が言うには、冉有お前は特に氣をつけなきゃいかん。冉有は社稷の臣だから、日本でいけば譜代の臣です。顓臾は属国としてもきちんとしているし、何も悪いことはしていない。それを何で征伐しようとするのだ。弟子の冉有が答えて、「**夫子**」は貴公子のこと。自分の主君が顓臾の領地を取りたいと思う。冉有と季路はどちらも、それはいけないことだと思っています。孔子が言うには、冉有よと。「**周任**」は周の記録管です。かつて言ったことがある。「**力を陳べて列に就く**」力を尽くして任にあたりなさい。出来なきゃ辞めればいい。君子が間違えていて、どうも国が危ない、その家が危ないと思ったら、助けなければいけない。お前たちが、その君主を諫めないのだったら、何でその地位に、のほほんとしているのか。お前は間違っておる。「**虎 兕**」というのは、どうも虎というのは、実物の虎よりも、化け物とか猛々しい獣というイメージを強くしているから、今の虎という感じではないと思います。「**兕**」も架空の生き物だけれども、角が出てとか凄い描写がある。だから怪獣みたいな、今でいけばゴジラの小型版みたいなものじゃないかと思っています。そういうイメージで言っていると思います。そういう猛獣共が檻から出てきて、「**亀玉**」は宝物。入れてある箱の中で壊れてしまったら、これは誰が責任をとるのだい。そういう事と同じじゃないか。冉有が言うには、顓臾は要塞堅固で、そして費という城に近い。今これを取っておかないと、「**後世必ず子孫の憂いを為さんと**」後世に間違えたな、失敗したなと子孫が悩んで困ることであろう。だから今のうちに手を打つべきではないか。そういう事を聞いて孔子が、求よ、お前は違うよ。「君子は」というのは、この場合、口の達者な人間は何か手に入れたいとき、自分の本音を言わないで必ず自分を正当化した別な言い方をするものだ。だからお前たちは、そういうことを諫めねばならん。

ここまで喋ると、今の安倍内閣が解散風を吹かせているのとびったり同じ様な感じがします。ほぼ似通っている感じ。安倍さんが解散風を吹かせるのであれば、周りが止めなければいけない。

解散を実際にして、憲法改正できるくらいの議員を抱えたい。選挙で大勝ちをしたいと思っても、もうちょっと違う方法があるのではないかと、正々堂々きちんと国民に話をする。それで選挙をすればよいと言う政治家はどうもおりませんね。煽ってばかり。おまけに野党が、解散権を我々に与えてくれたみたいなことを立憲民主党が言っています。野党の解散権というのは、内閣不信任案を提出すれば、これは解散の大義名分が立つと官房長官が言った。これは我々に解散権、非常に似ているまがい物の解散権を与えたようなものだという発言をしているから。与党も野党もどっちもどっちだなという気がします。

ただ安倍内閣が、ずっと続いたら日本の国どうなるのだろうみたいなことを事業承継会でディスカッションを致しました。解散風も吹かせて、本当に解散をして大勝ちしたら、また話は違うのでしょうか。安倍さんで氣になることは、健康問題はどうか。前は健康問題で駄目でしたが、いまは良い薬が出たから、もっているって話です。では、御夫人と

の間柄はどうか。メディアに出るときだけは仲良さそうに見えるけれども、どうもそうではないって話が巷間多すぎるじゃないかと。家も整えられず、自分の体も整えられない人間がいつまで持つのかね。それで日銀の総裁は、来年の春まで現在の金利政策を続けると言っているから、そのまま続きますよね。じゃぶじゃぶお金が出回っていますでしょう。ただ、日本の場合は非常に危なっかしい。中東戦争でも始まれば、アメリカが今のまま進んでいけば中東で戦争が起きる。中東で戦争が起きれば日本に油が入らなくなる。油が入らなくなれば、物価が上がる。それで、中国があれだけプレッシャーをかけ続ければ、中国とアメリカの間で揉め事が起きるのであろう。揉め事が起きるのであれば、中国はロシアと仲良くなって、大きな戦争は始まらなくても小競り合いの小さな戦争は始まる。そうなったら、日本はどのような立ち位置になるのか。この間、日本にトランプさんが来た。来た時は鳴り物入りで迎えた。帰る時は、あれ、いつ帰ったのだらうという感じで、メディアが報道しなかった。背景に何があるのか。トランプさんが言ったのは、日本は大切だ。アメリカの戦闘機、1兆円も出して買ってくれるから良いお客様だ。良いお客様の所には挨拶行かなきゃね。仲良くしなきゃねと。全部ビジネスの論理で動いているように見える。

論語を読むときは現代に置き換えて、現代に置き換えるとメディアが出しているものと組み合わせていくとパズルが少し解けてくる。日本はこれからどうするの。そして日本がどういくか見えたら、自分はどうするのかと置き換えて、後半を考えていきたいと思っています。

＜紹介書籍＞

『ひらがなでよめばわかる日本語』中西進著 新潮文庫

『につぼん賛歌』出雲井晶著 神社新報ブックス

『縄文人に学ぶ』上田篤著 新潮新書

この間、日本吟道奉賛会の中の緑村吟詠大会がありました。その大会は詩吟しかやらない集まりですが、御代替わりについてお話しくださいと頼まれました。御代替わりとか令和の元号決定の経緯や裏話などを話しました。

調べていくうちに、現地へ行きたくなり大宰府の天満宮に行き、政庁跡を見ました。やっぱり現地に行って体験すると、何となく感じが違うもので厳肅な気分にもなる。頭の中に出てきたのは、「日本の国柄だな」って思いました。今のアメリカが起爆剤になり、あちこちに喧嘩売ってますでしょう。それぞれに対する対応の仕方があります。そういうものを見ていると、日本という国は他の国々と違う。何で違うのだらう。日本の国柄ではないかと。それで国柄の事はないかなと、本棚にある本を見ていたら幾つかありました。私

は物を考えるときに、本質・歴史・大局の3つの視点で見ましょと申し上げています。

国柄を考えるときに、本棚にあった日本の歴史で、上田篤『縄文人に学ぶ』縄文時代から日本のことを考えましょ。

この間、立ち読みして良いなと思ったから購入した、中西進『ひらがなでよめばわかる日本語』これも面白い。それで『にっぽん賛歌』出雲井晶という方の書いた本。これらを回します。

日本の国柄を考えるとき、都内の雑踏の中を歩くと色々な国の人がありますね。最近の若い子同士で集まっているものにはあんまり氣品って感じないけれども、ある一定の年代以上の日本の方を見ると何となく氣品がありますよね。他の国と比べてね。そうすると日本の国柄を考えると、いったい日本の歴史はどんなのだろう。昔、木内信胤先生が喜んでおられたのが、日本は縄文時代が1万年前からあるから凄いとっておられた。縄文時代が青森県で発見された遺跡で、国家という定義を少し変えて考えると、文化とか文明、特に文化かな。その側面から日本をみれば、日本の国は縄文時代からとみると、1万3千年の歴史がある。1万3千年としたら大変なことです。1万年ぐらひは縄文時代が続いて、そのあとは弥生時代に入っていくということですけども、そういう歴史が目に見えない日本の心とか、日本の国柄をつくっているのかな。1万年にわたって、そんなに大きな争いをしないで、穏やかに暮らし続けていた民族だと考えると、凄いな民族だなと思う。それを裏付けるものとして、天皇陛下の存在がある。2679年間続いているという言い方が今の御代替わりのところにはですが、長く続いている皇室は、他の国々と比べると日本しかない。しかも男系の血筋が続いているという記録がある。実際に続いているかどうかは分からないけれども、そういう記録があり、そのように歴史は伝えている。他の国々で見ると、血筋が途絶えてしまう。イギリスが日本に似ているということですが、それでも1千年の歴史でしょう。それにイギリス王室の血筋は途絶えています。ドイツからロイヤルファミリーをもってきて据えた。歴史で見てそういうことであり、あとは国歌とか国旗がいいですかね。国歌の歌を考えると、日本の国歌は他の国々と比べて極端に違う。だいたい他の国、中国の国歌は「立て人民」でしょう。奴婢だから奴隷でしょう。極端だけれども、そんな類な言い方で、攻めてきた国は滅ぼせ。敵は殺し尽せとか。他の国には、そういう言葉が国歌の中に含まれている。日本の場合は違います。古今和歌集からとった平和を希求する歌。だから他の国とは表現がだいぶ違う。そういうところにも国柄が表れているなという氣がします。

それから言葉。昔、木内先生が日本語というのはね、不思議な言葉だと。どこの国の言語と比べてみても、こんなに特殊な言葉はない。先生に「何が特殊なのですか」と聞いたら、「だって考えてごらん。何でもみんな喰べちゃうんだから」と。何でも取り込んでしまうということです。中西進先生の書いた本で見ると、曖昧という言葉がある。元々は中国語です。曖昧という概念は日本には無かった。中国語で日本に入ってきて、いろいろ考え

て取り込んだら、曖昧がもう日本の言葉に感じてしまう。だから日本語を考えるときには、漢字で見るのではなくて、ひらがなで見た方が良いという薦めです。中西先生の本には書いていなかったけれども、ひらがなで考えていくと、玉ねぎの皮をむくみたいなもので、日本語の淵源をさかのぼって調べようと思えば皮をむいていくと、どんどん無くなっていくと、最後に日本語の元は何だというと、無くなっちゃみたいですね。

縄文時代、大陸から渡ってきた人類が日本に定住をし、それがまた滅び、また次に渡ってきて今の日本人の原型かな。言葉は古事記の中でいけば稗田阿礼が口伝で伝えていたものを太安万呂が文字で書き残したというのが、いまの古事記といわれています。でも考えてみたら、口伝で伝えてきた物を、万葉集で見れば、全て漢字で書いてある。今は漢字とひらがなが混ざった言葉で我々は読んでいるわけです。そういう漢字を母体にしながら、ひらがなやカタカナも作りだし、今はまあ、こういう新聞を見ます。

《時事評論》

昨日の読売新聞で、「中小企業の後継者に連帯保証は求めない」という内容の記事だけれど、これ見ると「政府の方針で個人保証脱却、政策パッケージとして表明する」なんて書いてある。パッケージって何さ。でもこういう言葉が、日本人はごく当たり前前に外来の言葉を取り入れる。取り込んで咀嚼して当たり前のように使ってしまう。ステテコとか、キセルとかは、もともとの日本語ではありません。散切り頭を叩いてみれば…で、はいからさんの言葉。みんな吸収して今の日本語になっている。日本語は、外国の文化を吸収し取り入れて我が物とし、それを更に発展させる。そういう特殊な能力を日本人は持つ。それを裏付ける物として日本語がある。日本語ほど外来文化を受け入れる文字はないと木内先生にお聞きしました。表現は違いますけれども、中西先生が書いている本と同じことをいっています。日本語を研究してみると、純粋な大和言葉だと思っていたら、あれ、いつ頃か中国から来た言葉。これはオランダから入ってきた言葉となります。さかのぼってみると、よそから入ってきた言葉を吸収して、もう日本語として定着をさせてしまった。それも歴史である。学者の中のお話でいけば、中西先生は珍しいことに、漢文が分って、ひらがなが分かる。変わった人だねという。令和の元号の話のときにしても集まりがあって、その中の一人ですけど、こういう言い方をしました。令和という元号は、万葉集の序文の中から取りました。序文は漢文です。したがって万葉集から取ったというのは嘘ではないけど本当でもないでしょう。あれは漢籍です。あの漢文は文選の中の帰田賦から取られているのは間違いございません。あれは、日本古典から取ったというよりは、漢籍から取られておるといふに我々は解釈をいたします。重箱の隅ほじくるような話だなと思います。学者はオタクと言うと怒るけどね。でも学者はオタクですから。研究家、専門家はオタクです。知らない事を必死になってやっているから。ということで、日本人という

のは本来とてもおおらかで、何でも取り入れて咀嚼してこなし、それを大和言葉に昇華させていく。そういう民族だから、言葉や色々な技術もそうですが、ビジネスも同じようなことが言えるのだと思います。はっと気がつくと、日本人は色々な国から良いところだけ取って、それを日本流に全部作り変えていくという能力がある。これから先々は他の国々が角突き合せた物を超越し包み込んでいく。そういう文化が日本の固有の、古来の文化なので、必然的に他の国々は日本の模倣をせざるをえないのではないかなという気がします。

そういう日本人だから、次々に起きる世の中の動きは、最初は何かピリピリと来ても、直ぐ受け止めて受け入れ、けっこう昇華をしていくことがあると思う。それでかなり前から私は通貨消滅ということを書いていました。通貨が無くなり、現金が無くなると思った。

今日の読売新聞でスウェーデンのことが一面に載ってまして、「我々はあなたが誰であろうと受け入れますが、現金は受け付けません」という人気ポップスグループ「アバ」の博物館チケット売り場に掲げている文章を見て慌てる観光客の姿もみられた。そもそも空港について、ほとんどがカード払い。キオスクやスーパーも現金は使えなくてもカードです。個人間の送金手数料が無料のアプリが爆発的に広がった。日本の場合を考えると、銀行の送金は取られる。郵便局が一番安いような気がする。スウェーデンで総人口の 7 割にあたる 700 万人が使っている。現金が出回っているのは国内総生産比で約 1%です。あと政府が配った冊子で危機の時に備えるリストに少額の現金が必要だということが載った。それぐらいのもの。

日本は中小企業・小規模事業者のキャッシュレス決済に 5%、フランチャイズには 2%ポイントをつける。消費税増税還元で代わっていくんじゃないかな。若い人ほど現金を持たないでカードでみんな終わり。でも現金を持っていないと何となく不安で落ち着かないね。その感覚を変えようと思って 1 週間ぐらい現金持たずに歩いてみようかな。自分で自分の生活習慣を変えようと思っています。変えていかないと後から追っかけていくのは大変。さて自分で生活習慣を変えないと戸惑ってしまって、私はこの世には無縁の存在だと悲しくなるので、先手先手で行動かな。

いずれにしても、通貨消滅が各国で進んでキャッシュレス化になってきています。日本も当然キャッシュレスにしようとしている。政府はキャッシュレス 4 割を目標に掲げて進んでいます。みずほ銀行の試算だと、年間 8 兆円とされる現金の輸送や管理にかかるコストが半減する可能性があるということです。

お金に関してもうひとつ。「中小企業の後継者に保証を求めず」後継者ができないのは、連帯保証を嫌がるから次の社長が決まらないという事です。そしたら政府が出したのが、個人保証を求めない。来年の 4 月から金融機関に強く求めるのは、会社がお金を借りるといふことであれば、今までは企業に連帯保証をさせるのが当たり前だった。これからは基本的に社長が連帯保証するのは禁止。他の新聞を見ると、優秀な企業は禁止。ちょろちょろっと言い方が違う。優秀でない企業はどうするのかと思うけど。例外規定は幾つか入れるだろうけど、基本的に禁止を打ち出したのです。ということで、個人から会社からお金

にすることが揺れ動いている。商工中金などは政府系の融資機関だから、これを守らなきゃいけない。今はもう緩んで、銀行はお金を貸したくてしょうがない。自分たちが危ないから。

矢野先生が世の中に出た時の話で、当時の田中角栄通商産業大臣とのやり取りがあります。その時代、その時代、波に乗っていくときは、やっぱり何かひとつの区切りというか、大きなきっかけがあると思います。矢野経済研究所は、データバンクや東京商工リサーチと同じように市場調査については発表が世間にでます。日米で繊維問題があった。田中通産大臣が繊維白書を作れと通商産業省に指示を出した。それが新聞に出た瞬間に矢野先生は、その当時お付き合いがあった政治家の賀屋興宣先生の名刺を持って田中通産大臣に会いに行った。話をした中で、先生は通産省に繊維白書を作れと指示したが民間は困ります。日本は民間をもっと発展させなければいけない。民間の力を活用すべきです。私も民間ですが繊維白書を発行したいと考えておりました。そう言ったところ田中通産大臣はちょっと考えて「では、君のところで白書を出しなさい」と言われた。そこで私は了解し、その上で田中通産大臣に序文をお願いしました。序文を書けば通産省公認です。しばらく田中通産大臣は考えて、承諾してくれました。これは全部、自分の力ではなく、賀屋興宣という名前で作ってくれたのだなとつくづく思われたそうです。これがスタートで、今日持ってきたものは2019年版のものですが、去年のって言い方です。市場調査で面白いなと思ったのは、1997年の百貨店は、だいたい12兆円。それから2017年は6兆円です。12兆円の業界が十数年経って6兆円に半減しました。それを喰ったのはどこか。スーパーです。今、スーパーは13兆円。百貨店が先行して、スーパーが追いかけてきた。ところが途中から出てきたコンビニがデパートを喰い、スーパーを喰った。今は百貨店が6兆円なのに、コンビニが13兆円。スーパーと肩を並べた。でもこれも百貨店・スーパー・コンビニを喰って、今度はネット販売。ネット販売は現在7兆円ということでございまして、いろいろ回した本も参考にさせていただきつつ日本の国柄を考えていただくと、おやっということが自分の心の中にグサッと突き刺さってくる。何か沸き起こってくると思います。是非そういう物も御覧いただき、そして新聞も見ると、何か自分なりのテーマがあると、はっとするものが最近は多いです。テーマのない方は右から左にいつちゃうけど、御自分の人生のテーマとか、気にしているテーマがあったら、必ずピリピリとくるテーマができます。どうぞみつけだして頂きたい。今日は以上です。有難うございました。